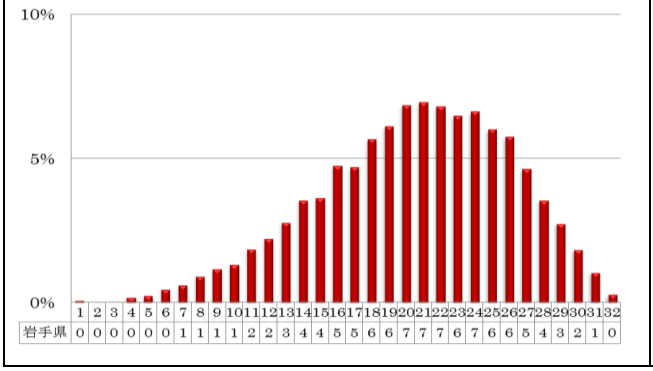
平成 29 年度岩手県中学校新入生学習状況調査　指導資料　　平成 29 年 7 月　発行　岩手県教育委員会

授業改善の手引　中学校第１学年国語

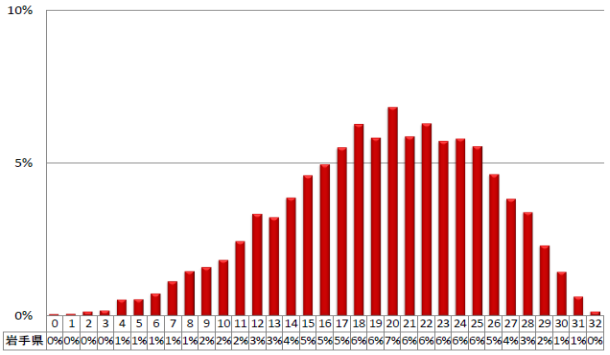
1　調査結果

(1)　分布状況

【H29】中１（29 年４月実施）



【H28】中１（28 年４月実施）



○　問題数は、昨年度と同じ 32 問、正答数の最頻値は 21 問、平均正答数は 20 問です。昨年度と比較すると、分布の山に大きな変動はありませんが、正答数 16 問以下の生徒数が 24%と、昨年度より 7 ポイント少なくなっています。

（正答数の最頻値：該当する生徒数の最も多い正答数）

(2)　領域等の正答率

領　域　等		正答率 （　）は H28 新入生学調、〈　〉は H27 県学調		
話すこと・聞くこと	（６問）	75%	(74%)	〈69%〉
書くこと	（３問）	42%	(47%)	〈56%〉
読むこと	(10 問)	41%	(51%)	〈66%〉
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	(13 問)	74%	(65%)	〈75%〉
活用	（３問）	39%	(43%)	〈50%〉

(3)　結果概要

○　領域ごとの正答率において、「話すこと・聞くこと」が 75%と昨年度を１ポイント上回りました。特に、小問ごとの正答率において、「話し手の意図を考えながら、話の内容を聞く」問題が 88%（＋５ポイント）、「話し合いにおける司会の役割がわかる」問題が 84%（＋２ポイント）で、よい状況にあります。

○　「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「敬語を正しく使う」問題においては正答率が 83%と昨年度を 18 ポイント、「熟語の構成を意味との関わりから理解する」問題においては正答率が 80%と昨年度を 28 ポイント、それぞれ上回り、改善傾向にあります。

●　領域ごとの正答率において、「書くこと」が 42%（－５ポイント）、「読むこと」が 41%（－10 ポイント）、と昨年度を下回る結果となりました。特に、文学的文章（大問４）の正答率の低さが目立ちました。

●　活用問題（３問）が 39%と昨年度を４ポイント下回りました。また、「書くこと」領域の無解答率の割合が 25%と昨年度より５ポイント上回ったことから、表現様式や条件に応じた文章を書くことについて、引き続き指導の工夫が必要な状況にあります。

(4) 小問別正答率

問題番号 大問	中問	小問	通番号	調査問題のねらい	学習指導要領との関連	主な観点	備考	正答率	選択 No. 1 選択	2 選択	3 選択	4 選択	5 誤答	6 正答	0 無答 （人）
1	(1)		1	話し手の意図を考えながら、話の内容を聞くことができる。	第5・6学年「話・聞」(1)エ	話・聞		61					35	61	3
	(2)		2	話し手の意図を考えながら、話の内容を聞くことができる。	第5・6学年「話・聞」(1)エ	話・聞		88	7	1	4	88	0		0
	(3)		3	話し合いにおける司会の役割がわかる。	第5・6学年「話・聞」(1)オ	話・聞	経年	84	84	4	5	6	0		0
2	(1)		4	目的や状況に応じて質問をすることができる。	第3・4学年「話・聞」(1)エ	話・聞		78	5	11	78	6	0		0
	(2)		5	目的や状況に応じて質問をすることができる。	第3・4学年「話・聞」(1)エ	話・聞		74	74	13	5	8	0		0
	(3)		6	目的や意図に応じて話すことができる。	第5・6学年「話・聞」(1)エ	話・聞		66	20	66	4	10	0		0
3	(1)	①	7	漢字「改革」を正しく読むことができる。	第5・6学年「伝国」(1)ウ(ア)	伝国		88					10	88	2
		②	8	漢字「訪ねる」を正しく読むことができる。	第5・6学年「伝国」(1)ウ(ア)	伝国		98					2	98	0
	(2)	①	9	漢字「否定」を正しく書くことができる。	第5・6学年「伝国」(1)ウ(ア)	伝国		68					23	68	9
		②	10	漢字「厳しい」を正しく書くことができる。	第5・6学年「伝国」(1)ウ(ア)	伝国		69					22	69	9
	(3)		11	日常使われる敬語を正しく使うことができる。	第5・6学年「伝国」(1)イ(ク)	伝国		83					16	83	1
	(4)		12	ローマ字で表記されたものを読むことができる。	第3・4学年「伝国」(1)ウ(ア)	伝国		72	9	5	72	12	1		1
	(5)	ア	13	理解するために必要な語句について、辞書を活用して調べることができる。	第3・4学年「伝国」(1)イ(カ)	伝国		47					32	47	21
		イ	14	理解するために必要な語句について、辞書を活用して調べることができる。	第3・4学年「伝国」(1)イ(カ)	伝国		77					20	77	4
	(6)		15	和語・漢語・外来語の区別について理解している。	第5・6学年「伝国」(1)イ(エ)	伝国		90					7	90	4
	(7)		16	熟語の構成を意味との関わりから理解している。	第5・6学年「伝国」(1)イ(エ)	伝国		80	2	80	4	11	2		0
	(8)		17	文の構成について理解している。	第5・6学年「伝国」(1)イ(キ)	伝国	経年	65	18	65	14	2	1		0
	(9)		18	故事成語の意味や使い方を理解している。	第3・4学年「伝国」(1)ア(イ)	伝国		58	14	15	12	58	1		1
	(10)		19	文脈に沿って、漢字を適切に使うことができる。	第5・6学年「伝国」(1)ウ(ア)	伝国		63					22	63	15
4	(1)		20	場面の移り変わりを読むことができる。	第3・4学年「読」(1)ウ	読		26					72	26	3
	(2)		21	場面の描写と登場人物の様子を読むことができる。	第5・6学年「読」(1)エ	読		34					59	34	7
	(3)		22	登場人物の相互関係を読むことができる。	第5・6学年「読」(1)エ	読		70	70	10	4	15	1		1
	(4)		23	登場人物の心情を読むことができる。	第5・6学年「読」(1)エ	読	経年活用	43	6	8	41	43	1		2
	(5)		24	登場人物の心情を読むことができる。	第5・6学年「読」(1)エ	読		20					59	20	21
5	(1)		25	文章の内容を的確に押さえて読むことができる。	第5・6学年「読」(1)ウ	読		36	11	36	34	14	3		2
	(2)		26	文章の内容を的確に押さえて読むことができる。	第5・6学年「読」(1)ウ	読		47	12	28	47	8	1		4
	(3)		27	目的に応じて、中心となる語や文を捉えて読むことができる。	第3・4学年「読」(1)イ	読		57					34	57	9
	(4)		28	文章の要旨を捉えて読むことができる。	第3・4学年「読」(1)ウ	読	経年活用	40					46	40	14
	(5)		29	文章の構成を捉えて読むことができる。	第5・6学年「読」(1)ウ	読	経年	42	14	15	42	14	1		14
6	条件①		30	段落構成を考えながら指定された長さの文章を書くことができる。	第3・4学年「書」(1)イ	書		51					26	51	24
	条件②		31	表やグラフから読み取ったことをまとめて書くことができる。	第5・6学年「書」(1)エ	書	経年活用	36					39	36	25
	条件③		32	根拠に基づいて自分の考えを書くことができる。	第5・6学年「書」(1)ウ	書	経年	41					28	41	32
					全体正答率			61							

２　指導のポイント

(1)　人物像や内面にある深い心情を表現の仕方と結び付けながら捉えられるよう、場面の展開や登場人物の相互関係などの描写に着目しながら読み深める学習活動を充実させましょう。

ア　問題の概要

4 (5) 登場人物の心情を読む。　第５・６学年「読」エ　【正答率　20%　無解答率　21%】

イ　誤答分析

誤答を分析すると、線部（引用文）近くの情景描写や暗示的な表現をそのまま解答したもの、「月より遠い」という表現から二人の距離が離れることに対する不安と捉えたものが多く見られました。また、設問文中の「これからの春子との関係をどう受け止め」から、前向きに良好な関係性を築こうとする心情を表現した解答も見られました。

この問題は、登場人物の相互関係から人物像やその役割を捉え、そのことによって内面にある深い心情を捉えることが求められるため、文章全体の中で人物相互の関係から心情を捉え、その根拠となる叙述に着目しながら読む力に課題があると考えられます。

ウ　指導上の留意点

（ア）　登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉えることについては、既に小学校第５学年及び第６学年（指導事項エ）で学習しています。このことは、中学校第１学年の、時間的・空間的な場面の展開、人物の心情や行動、情景描写などに注意して読み、内容の理解に役立てる学習につながります。

（イ）　指導に当たっては、登場人物の相互関係について、中心人物と周辺人物の関わりが分かる言葉や行動に視点を定めて読んだり、語り手の視点を変えて読んだりすることで、互いの人物像の描かれ方や中心人物との関係性を捉えることが大切です。

また、情景描写による暗示的な表現を場面の展開に即して考えることができるよう、暗示されていること（「状況」「行動」「心情」）を情景描写の前後にある叙述から捉え、特に心情を表す表現の仕方に注意しながら読むことが大切です。

こうした学習は、互いの考えや根拠となる叙述の妥当性などを検討できる場を設定することで、自分の考えを補完したり深めたりできることにつながります。

(2)　説明的な文章の特徴を踏まえて内容を把握しながら、目的や必要に応じて要約したり要旨を捉えたりする学習活動を充実させましょう。

ア　問題の概要

5 (4) 文章の要旨を捉えて読む。　第５・６学年「読」ウ　【正答率　40%　無解答率　14%】

イ　誤答分析

誤答を分析すると、形式段落⑤の「そうやって」より前に挙げられている具体例から一つを選んで解答する傾向が多く見られました。

ここでは、文章全体の内容や構成を的確に押さえながら、取り上げられている内容の中心や、書き手の考えの中心となる事柄を要旨として捉えることが求められるため、文章全体に書かれている話題、理由と根拠となっている内容、構成や巧みな叙述に注意するなど、文章全体から内容を的確に押さえる力に課題があることが考えられます。

ウ　指導上の留意点

（ア）　小学校では第５学年及び第６学年の指導事項ウにかかわって、目的に応じて、文章の内容を的確に押さえながら要旨を捉える学習を行っています。このことは、中学校第１学年「読むこと」の指導事項イ「文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などとを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨を捉えたりすること。」につながります。

（イ）　指導に当たっては、要旨を捉えることができるよう、提示されている話題と、その話題について説明されている事柄を踏まえて、必要な情報を選択し整理することが大切になります。その際、論の展開の中心となる部分と、それを支える例示や引用などの付加的な部分とを読み分け、内容を理

解することが重要になります。また、見出しが付けられた文章では、中心的な部分を捉えるために見出しに着目して読むことも効果的です。

また、目的や必要に応じて要約したり要旨を捉えたりできるよう、その目的や必要によって取り上げる言葉や文が変わることや、条件に合わせてまとめる必要があることを実感できる言語活動を単元の中に意図的に位置付けていきましょう。

(3) 得た情報の中から自分の考えの根拠となる事柄を捉えて根拠を明確にして書く学習を大切にしましょう。

ア 問題の概要

6 条件② 表やグラフから読み取ったことをまとめて書く。

第５・６学年「書」エ 【正答率 36% 無解答率 25%】

条件③ 根拠に基づいて自分の考えを書く。

第５・６学年「書」ウ 【正答率 40% 無解答率 31%】

イ 誤答分析

誤答の多くは、条件②「具体的な数値を入れて書くことができていないもの」、条件③「資料から読み取ったことを踏まえていないもの」でした。また、無解答率は、昨年度をやや上回る結果となりました。

この問題では、資料から読み取った情報や自分の考えについて適切な言葉や数値を用いて記述する力や、資料から必要な情報を取り出し、比較したり関係付けたりしながら自分の考えを明確にすることが求められます。そのため、資料から取り出した情報の書き表し方の理解や、図表やグラフを用いて自分の考えを書く経験が不足していることが考えられます。

ウ 指導上の留意点

（ア） 小学校では、第５学年及び第６学年の「書くこと」の指導事項ウ・エにかかわって、事実と感想、意見などとを区別して書く学習や図表やグラフなどを用いて自分の考えが伝わるように書く学習を行っています。このことは、中学校第１学年「書くこと」の指導事項ウ「伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと。」につながります。

（イ） 指導に当たっては、根拠を明確にして自分の考えを書くことができるよう、構成を十分検討することが必要です。構成ではどのような点に着目して整理すればよいのか、具体的にその考え方を取り上げて指導することが大切です。例えば、根拠の妥当性を検討する場の設定（用いた図表やグラフが自分の考えを明確に伝えるための根拠となっているかどうか、その内容が適切かどうかなど）です。あわせて、必要な数値（「○%以上」等）や概略を示す言葉（「おおよそ」等）、比較を示す言葉（「上回る・下回る」等）を使用するなど、読み取った情報を相手に分かりやすく伝えるための言葉を選択させるような指導も大切にしましょう。

このように、書こうとする中心からそれないよう、自分の伝えたいことに立ち返る場の設定は、目的意識の持続という点でも有効です。そうして、第１学年では書こうとするまとまりや順序を明確にし、段落の役割を踏まえた文章の構成を考えることができるようにしましょう。次頁に展開例を掲載します。

【根拠を明確にして、自分の考えを具体的に書く活動を位置付けた展開例】

教材例　ボランティア活動に関わる資料Ａ・Ｂ（平成 29 年岩手県新入生学習状況調査国語６　）

次	時	主な学習活動	留意点
1	①	(1)学習の見通しをもつ。 (2)Ａ、Ｂの資料から読み取ったことを分類・整理する。 (3)資料から読み取ったことを踏まえてボランティア活動について考えをもつ。 (4)書く内容の中心と考えの根拠が明確になるように構成を考える。	※(2)(3)は付箋紙に書き出し、操作しながら思考できるようにする。 ※(4)展開例参照
2	②	(1)構成表を交流し、根拠の妥当性について助言し合う。 (2)助言を参考にしながら、構成を再検討する。	※(1)交流例参照
	③	(1)構成表を基にしながら、自分の考えを文章にまとめる。 (2)推敲する。	※条件（400 字・３段落構成）について再確認する。
3	④	(1)文章を読み合い、感想を交流する。 【感想の観点】・考え（ボランティア活動について）について ・根拠の妥当性について	※単元を振り返り、付いた力や考えの深まりを自覚できるようにする。

≪第１時(4)：「思考の流れ」を示すモデルを提示する≫

思考の流れを示す
先生は、「自分たち大人が進んで多様なボランティア活動を実践することで、参加する高校生を増やしたい（考え）と考えました。なぜなら日本で参加したことのない高校生が16.7%もいるから（根拠）です。」
考えの根拠として適切でしょうか。

○構成について考えよう。
（グラフで読み取ったこと）
日本は、支援や献血にアメリカの約三分の一しか参加していない。
参加したことのない割合は、日本がアメリカより約四%多い。
日本は「その他」の活動が約十一%で、アメリカの約三分の一。
（ボランティアについて考えたこと）
今後は、もっと多様なボランティアに積極的に参加していきたい。

書き手の意図を考える
先生が多様な活動をしていることを姿で示し、生徒たちの関心を高めて参加する人を増やしたい、という考えですね。

根拠の適切さを考える
先生の考えなら、根拠は別の方がふさわしいと思うよ。なぜなら、「寄付」には50%も参加しているから。でも体験をしている人は少ないよね。

代案を示し比較する
例えば「支援」や「献血」の少なさを根拠にしてはどうですか？そうすれば「もっと多様な活動を」という先生の考えに説得力が増すと思うよ。

≪第２時(1)：観点に沿って助言する≫

【交流での助言例】

根拠の妥当性について助言し合おう。
[助言の観点]
① 資料から読み取ったことと関連した考えか。
(書き手の意図を理解する)
② 別の情報を根拠とするよりも説得力があるか。
（代案を示して比較する）

「多様なボランティアに参加したい」という考えなら「その他」の項目を根拠として取り上げたらどうかな。「その他」に含まれるボランティア活動が具体的にわかれば、より確かな根拠として示すことができるよね。

なるほど、「その他」に含まれている活動を調べて考えの根拠にすれば、もっといろいろなボランティアに興味をもって、活動に参加してくれそうだね。

「高齢者や障がい者の支援」の項目を根拠として取り上げて、日本とアメリカの差について「大きい」と書いているけれど、そこは「32.6%」と具体的な数値で示したほうが、より説得力が増すよね。

「アメリカの高校生の意識の高さを見習って、自分も友人を誘ってボランティア活動に参加したい。」と考える根拠に「お金や物の寄付」のことを取り上げているけれど、「支援」のことも付け加えるとより説得力が増すと思うよ。